

ブルーベリーのコンテナ養液土耕栽培

著者	福留 弘康
雑誌名	鹿児島大学農学部農場技術調査報告書
巻	16
ページ	39-40
URL	http://hdl.handle.net/10232/9646

ブルーベリーのコンテナ養液土耕栽培

福留 弘 康
(農学部附属農場)

緒言

ブルーベリー (*Vaccinium* spp.) はツツジ科スノキ属に分類され、ハイブッシュブルーベリー、ラビットアイブルーベリー及びローブッシュブルーベリーからなる北アメリカ大陸原産の低木性果樹である。近年ブルーベリーの果実に含まれるアントシアニン色素の優れた機能が明らかにされ、国内でも広く栽培されている。唐湊果樹園では14品種(北部ハイブッシュ1品種、南部ハイブッシュ6品種、ラビットアイ7品種)を保存・栽培している。しかし、ここ数年露地栽培していた株が土壌伝染性の紋羽病により枯死する状況が相次いだ。そこで、遺伝資源としての確実な保存及び実習教育へのいっそうの利用を目的とし、土壌伝染性病害の予防に極めて有効な「コンテナ養液土耕栽培」を平成20年度実習教育改善経費により導入した。本報告では導入から2009年12月までの栽培状況を報告する。

コンテナ養液土耕栽培の導入

栽培は既設のハウスを改修して行った。ハウスの外側は鳥害・寒害防止のためビニルで被覆した。露地植えのブルーベリーは全て掘りあげ、地面を防草シートで覆った(第1図)。養液栽培システムには液肥混入器(商品名ドサトロン比例式混入器、イリテック社製)を設置し、多機能放射ドリップ(商品名オクタフロー、サンホープ社製)で散水・給液を行った(第2、3図)。ブルーベリーは2008年12月から翌年2月にかけて学生実習にてプラスチックコンテナ(内寸487×330×298mm、内容量47.2ℓ)に定植した(第4図)。ピートモスと鹿沼土を1:1の割合で混合した用土を用い、掘りあげた成木と既存苗で合計265本を定植した(第1表)。定植後はハウス内に搬入し、防根透水シートの上に置きコンテナを包んだ(第5図)。

栽培管理は新梢及び地下部の成長を促すためすべての花(果)芽は除去して結実させなかった。また、地下茎から発生する吸枝(サッカー)を9月下旬に剪定した。一部コガネムシ幼虫の食害による立枯れが発生したため補植を行った。

液肥はアメリカミシガン州における植付けから成木に達するまでの施肥量を示した樹齢別施肥例¹⁾を参考に10a当たりN:1.2kg、P²O⁵:0.6kg、K²O:0.6kgを液肥混入器で1000倍に希釈し、年4回に分けて散布した。なお養液のオーバーフローがないように1回の散水時間は4分とした。

害虫はアブラムシ、ハマキムシ、ヒロヘリアオイラガ、コガネムシ幼虫、シャシャンボツバメスガ、カイガラムシ類、コウモリガの発生がみられ、捕殺や殺虫剤による防除を行った(第2表)。

今後の展望

ブルーベリーは栽培開始から順調な生育をみせている。紋羽病による被害の拡大を回避できたことで、これまで判別しにくかった品種の樹形や樹勢の特徴も明確になってきている。挿し木実習においても十分量の挿し穂が確保できるようになった。平成22年度から着果させる予定であり、収量・果実品質がどのようになるのかを検討していく計画である。さらに唐湊果樹園における品種別の発芽から落葉までの特徴を調査するとともにブルーベリーの養液栽培管理技術の確立を目指し、安定したブルーベリー栽培につなげていきたい。

1) 果樹園芸大百科 16. 落葉特産果樹。(2000年) P262. 農文協出版

